
されど大海は天を摩る

覇槍 武零紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

されど大海は天を摩る

【Nコード】

N9162P

【作者名】

覇槍 武零紅

【あらすじ】

高木真一は天才であった。日本一と言われる国立聖城大学に通い、その中でも常にトップの成績を修めていた。

彼は自分自身を憂いていた。自分にとってこの世界が、あまりにも簡単に退屈だったから……

そんな彼はふとしたきっかけで自殺サイトに興味を持ちだし、チャット入室してサイトを覗くことを始めた。

「死にたい」と嘆く人、「死ぬな」と励ます人、やはり文字だけのやり取りは真一にとって暇つぶしにしかならなかった。

だがそのチャットで彼はHNを「XA^{イクサ}」と名乗る謎の男に出会う……

天才の日常

2010年の11月のある朝、東京にキャンパスを置く日本一を誇る国立大学『星城大学』に通う1人の茶髪の男子学生……

（男子学生）「……………」

その男子学生はウォークマンで音楽を聴きながら、1人星城大学の門をくぐる。

何か頭の中で考え事をしているようで完璧に黙りこくっていた。

時刻は8時47分……………

その男子学生は広々とした教室に入って席に座り、9時から始まる講義に向けてシャーペンやノートを取り出していた。

依然ウォークマンで音楽を聴き、周りを全く見ることなく真っ直ぐ前を見て講義が始まるのを待った。

その間にも彼は考え事をしていた……………

（男子学生）「……………」

彼の名は高木真一。有名国立大学であるこの星城大学に通い、尚且つ常に校内トップの成績を修めている。

それは大学に入る前から、いや生まれた時から彼はトップという座位に降臨していた。

子どもの頃は有名私立小学校付属の幼稚園、その後その小学校を卒業し、これまた有名私立中高一貫学校に進学して、ついには今の日本一賢い星城大学へと進学し、一度も留年することなく4回生に上がってきた。

要するに彼は天才なのだ。しかも彼の知能は努力ではなく才能であった。つまり彼は日本中で誰よりも優れた頭脳を持った学生なので

ある。

だが彼はその事とは関係なく、常日頃から考え事をしていた……………

(真一)「……………」

午前9時、一限目の講義が始まる時間となり、教諭が教室に入ってきた。真一は耳からイヤホンを外してウォークマンの電源をOFFにした。

(教諭)「よし、じゃ先週の話の続きだ……………」

教諭は淡々と講義を始め、真一はさほどメモを取ることもなくただただ講義に耳を傾けていた。

これだけでも真一は講義の内容を完璧に理解することができるのだ。まさに才能である。

そんな真一だが4回生になっても就活は全くしていない。その証拠に今でも茶髪であるし、毎日のように講義に出続けている。

当然そうするには真一なりの理由がある。といってもまともな理由とは思えない理由だが……………

(真一)「……………暇だ……………」

要は単なる暇潰しである。家にいてもすることがなく就活をする気もないから今までのようにただただ大学に出席して講義を受けている、ということである。

確かに着実に知識を仕入れている分家にいるよりかは有意義なのだが……………

(真一)「……………」

頭がよく常に考え事をしている割には、就活など将来のことには一切関心を示さない。真一の同回生は就活を行っているのにも関わらずである。そのわけは……………

(真一)「……………」

今日の講義は1限だけだった。友達は就活などで大学にいないので

即座に家に帰っていった。真一は1人暮らしである。

時刻は11時。真一は自宅の扉を開け中に入っていく。家賃は4万5千円の1Kなのでそこまで広い部屋ではないが、真一は苦痛に思ったことはなかった。

真一は才能には恵まれていたが、真一の両親が数年前に他界してしまい、金銭面ではあまり恵まれていなかった。そのため幼稚園の頃から奨学金を借り、常に成績優秀者として授業料等は全額免除で生活してきた。

今は両親が遺してくれた遺産で生活費を賄っている。

(真一)「ふう……………」

真一はソファに座ってテレビをつける。それと同時に机の上のパソコンの電源をつけた。

パソコンは静かに起動していく。真一はその間テレビを見る。

といっても時刻は午前11時、どれだけチャンネルを変えても真一が満足するような内容のテレビは一切放送されていなかった。

(真一)「あゝあ、マジでつままないな……………」

真一はリモコンでテレビを消してからソファから立ち上がり、椅子に座って起動しているパソコンと向き合う。

(真一)「……………」

真一はまた黙って考え事を始める。パソコンは着々と起動していく。そしてパソコンが起動しきると、真一はインターネットに接続して黙々とサイトを閲覧しだした。

(真一)「……………」

時にはネットサーフィンをしたり、時には課金して音楽をダウンロードしたりを繰り返していた。

その間ずっと考え事をやめることはなかった……………

そうして真一がネットサーフィンを繰り返しているとチャットできるサイトを見つけた。

真一は暇潰しになると思い、そのチャットに参加することにした。

「ゲスト563さんが入室しました。」

真一は初めてそのチャットに参加したので、563番目のゲストとして『ゲスト563』という名前が与えられた。その他の参加者は3名いた。

真一 > こんにちは。

するとその他の参加者が次々と挨拶をしてきた。

花美 > こんにちは♪

ゲスト519 > こんにちは

コウキ > こんにちは！

花美 > ……ゲストさん達は名前つけないの？

真一はその言葉で一度は名前を考えたが、すぐにめんどくさくなって本名を入れることにした。

「ゲスト563さんは『真一』と名前を変えました。」

「ゲスト519さんは『デンデン』と名前を変えました。」

デンデン > これでいいかな？

コウキ > いいと思うよ！

真一 > 改めてよろしく。

花美 > 真一さんデンデンさんよろしくね♪

そして真一はチャット内で他愛無い話をして暇をつぶそうとした。

真一 > 皆さんどこに住んでるの？俺は東京。

花美 > 私は鹿児島♪

コウキ > 鳥取。

デンデン > 青森だよ。

花美 > 真一さん都会に住んでるんだね♪

真一 > 星城大学に通ってるからその近くで1人暮らししてるから。

真一が星城大学の名前を出した途端チャット内の空気が変わった。

コウキ > 星城大学！？すげえ賢いじゃん！！

デンデン > 真一さん大学生なんですね。

花美 > あの日本一の大学に通ってるなんてすごい！！！！

真一 > いや、それほどでも……………

真一からすれば星城大学の入学にそこまで苦労はしていないので持ち上げられて複雑な心境となったが、一般人からすれば今よりもっと大きなリアクションが起きていてもおかしくないことである。

デンデン > 日本一の大学ってことは本当に賢いんですね！

花美 > そうだよ！デンデンさんは大学生？

デンデン > 僕は中学生ですよ。

花美 > そうなんだあ♪

「ラビリンスさんが入室しました。」

突然ラビリンスという名前がチャットに参加してきた。

ラビリンス > こんにちは

花美 > こんにちは♪

デンデン > こんにちは

真一 > こんにちは。

コウキ > すげえマジかあ！星城大学とか夢のまた夢だ……………笑
ラビリンス > 何の話？

花美 > 真一さんが星城大学に通ってるんですって！すごくない！？

ラビリンス > 星城大学？

真一 > よろしく。

するとラビリンスは突然こんなことを言い出した。

ラビリンス > 星城大学とかウソだろwwww

(真一)「はあ？」

真一はパソコンに向かって声にだして怒りの表情を表した。もちろんチャットの他の参加者はそれを察することはできない。

ラビリンス > 注目されたいからってそんなウソつくなよwwww
wwww

真一 > ウソじゃねえよ！

花美 > そうだよ、真一さんはウソついてないと思う♪

ラビリンズ > ムキになってる時点でもうバレバレwwww
そんなウソついて恥ずかしくないのwwww

真一はラビリンズの発言に物凄く腹を立てる。でも本当に星城大学に通ってることをチャットじゃ証明できないこともわかっていた。

ラビリンズ > ウソじゃないってんなら証拠見せてみろよww
ww

(真一)「……………(出た出た、馬鹿が言う決まり文句。こんな奴を相手にしても面白くねえ……………)」

真一はそう判断し、ラビリンズを相手にすることをやめた。

真一 > コウキさん、何か話ませんか？

コウキ > いいですよ。

ラビリンズ > おいおい証拠見せれないってなったら無視かよ
ww低脳だなwwww

花美 > ちょっと！悪口はよくないよ！みんな仲良くしよ！

ラビリンズ > うるせえよババアwwww

ラビリンズは真一だけでなく花美にも暴言を吐く。

デンデン > ラビリンズさんいい加減にしてください！見てて不快です！

ラビリンズ > あいつがウソついたのがそもその原因だろww
ww

(真一)「……………(もう無視しても腹が立つな。もういい。)」

真一はマウスを動かし退室の所にカーソルを持って行って！

「真一さんが退室しました。」

退室をクリックしてそのチャットルームから出て行った。そしてそのページを即座に閉じた。おそらく真一が退室した後でもラビリンズが馬鹿の一つ覚えのように罵っているのだろうと思いがら。

(真一)「あゝあ、何してても面白くねえ。どうしたもんか……………」

真一は椅子から立ち上がり、部屋のソファに座り込んだ。

（真一）「……………」

そしてまた真一は考え事を始めた…………

時刻は12時を回って午後12時15分…………

その時テーブルに置いてあった真一のケータイが鳴り出した。どうやら電話着信が来たようだ。

（真一）「誰だ……………」

真一はケータイを取って確認すると、同回生の友達の津崎卓司から電話がかかっていた。

そして真一は卓司からの電話に出た。

(真一) 「もしもし?」

(卓司) 「よお真一、今暇!？」

卓司は軽快な口調で話しかける。

(真一) 「おう、暇だよ。」

(卓司) 「じゃあさ、今からボーリングいかね?」

真一は卓司のこの言葉に少し驚いた。

(真一) 「お前今日就活じゃなかったか!？」

(卓司) 「そんなもんでもいいんだよ。今から遊ぼうぜ!」

(真一) 「ったくゝ将来がどうなってもしらねえぞ……」

真一は少し呆れた顔をしながら電話で卓司に言った。そして……

(真一) 「いいぜ。ボーリングって駅前のいつものとこだな?」

(卓司) 「ああ! 待ってるぜ!」

卓司からの電話はあっけなく切れた。

(真一) 「……まあ、遊ぶのが一番の暇潰しか……」

そして真一は外に出て駅前のボーリング場に歩いて向かっていった。

時刻は12時48分。真一は駅前に着いたが、すぐにボーリング場には向かわない。

(真一) 「腹が減った……」

真一はおにぎりを買って外で食べようとコンビニに寄る。

(店員) 「いらっしやいませ。」

(真一) 「……」

真一は店員の挨拶もあつさり無視しておにぎりを買っているコーナーに真っ直ぐ向かった。

(真一) 「…… (これにしようか。)」

真一はエビマヨのおにぎりを選んで、次に財布の中身を確認した。

(真一) 「げっ……………」

真一はここで所持金が500円近くしか持っていなかったことに気付く。これではおにぎりは買えてもボーリング代は到底払えない……

(真一) 「……………(仕方ねえ、またあの手でいくか……………)」

真一は結局エビマヨのおにぎりを買って、残金が350円程になった状態で卓司たちが待つボーリング場に向かっていく。手に持つおにぎりを食べながら……………

時刻は1時前……………

(卓司) 「お！やっと来た！」

(真一) 「悪い、ちよっと遅れた。」

卓司と真一が合流した。そこには同じ同回生の国嶋直樹と阪井静流しずるがいた。

どちらも男性である。

(真一) 「今日も6ゲームか？」

(卓司) 「ああ、いつも通り投げ放題だぜ！」

(真一) 「OK！」

(卓司) 「じゃ早速ボーリングしようぜ！」

(真一) 「ちよっと待った！」

真一は急かす卓司を、手を挙げて制止した。

(真一) 「その前に、賭けをしないか？」

(卓司) 「げっ……………」

(静流) 「賭け？」

真一の提案に卓司はあからさまに嫌な顔をしたが、静流は賭けに少し興味を持った様子でいた。

(真一) 「簡単なことさ、1ゲームごとに最下位が1位に500円渡すっていう賭けをしようぜ。その方が盛り上がるだろ？」

(卓司) 「やっぱりか……………」

卓司は真一の思惑を全て悟ったかのように落胆した。

(静流) 「いいぜ！真一の腕がどれくらいかしらねえけど俺ボーリング強いし一位狙ってやるよ！」

(真一) 「じゃあ決まりだな！」

賭けの提案が通ったことで真一は不敵な笑みを浮かべる。

(卓司) 「やっぱこうなるのか……………」

(直樹) 「？」

卓司はさらに落胆した表情を見せる。直樹は状況が理解できていないという表情をずっと繰り返していた。

そしてボーリングは始まった。1番は静流だった。

(静流) 「見てろよ……………賭けの話を出したことを後悔させてやるぜ！」

静流が1投目を力強いストレートで投げた。そして見事に全てのピンを倒した！

(直樹) 「おおー！！！」

(真一) 「ナイスストライク！」

(静流) 「へへっ、どうだ！？」

(真一) 「まだまだ始まったばかりじゃねえか。勝負はどうなるかわかんねえぜ。」

2番手は卓司だった。

(卓司) 「最下位になって出費することだけは避けてやる！」

卓司が1投目をストレートで投げた。1投目で8本のピンが倒れ、2投目では残り2本が倒せずガーターになってしまった。

(卓司) 「まあまずまずか……………」

3番手は直樹だった。

(直樹) 「とりあえず最下位にならなかつたらいいんだろ！？」

直樹は1投目をストレートで投げた。1投目で6本のピンが倒れ、2投目で残り4本のピンを全て倒してスペアをとった。

(卓司) 「え！？お前スペア！？マジかよ俺最下位じゃん！」

(直樹) 「さすがに500円は痛いからねえ。」

直樹は少し嘲笑いながら卓司を見下した。

4番手は真一だった。

(静流) 「お手並み拝見といくか……………」

(卓司) 「拝見するまでもねえよ……………」

(静流) 「ん？」

真一は無言で1投目を投げた。だが真一の投げた球にはカーブがかかっていて、見事に全てのピンを倒してストライクとなった！

(静流) 「カーブかよ！？こりゃ手強いなあ……………」

(卓司) 「手強いなんてレベルじゃねえよ……………あゝあ……………」

(静流) 「なあに！これからが勝負だ！」

(真一) 「へへっ……………」

そしてその順番通りに投球し、1ゲームは順調に進んでいった。その結果……………

(静流) 「おい……………マジかよ……………」

(直樹) 「こんなの初めて見た……………」

(卓司) 「天才とはこんなもんさ。まあ俺が最下位じゃなかっただけマシか……………」

全員のスコアはそれぞれ、静流は187、卓司は125、直樹は118、そして真一は259となり、真一の圧勝だった。

(真一) 「悪いな。」

(静流) 「こんなに強いなんて聞いてねえぞ！？」

(卓司) 「真一が天才なのはみんな知ってたろ……………あいつは頭だけじゃねえんだよ。」

(真一) 「約束通り500円よろしく。」

真一は直樹に向けて手を広げた。

(直樹) 「ちくしょー……………」

直樹は真一に渋々500円を手渡した。

(真一) 「じゃ次のゲームしようぜ！」

(卓司) 「これが後5ゲームか……………」
(直樹) 「悪夢だ……………」

そしてこのような調子で6ゲーム全てが終了し、予想通り真一が3000円を手にした。ちなみに直樹と卓司がそれぞれ真一に1500円ずつ出し合う結果となった。

(真一) 「おっしゃあ！」

(静流) 「結局1回も勝てなかった……………」

(直樹) 「1500円か、痛いなあ……………」

(卓司) 「1500円で済んだだけマシだ……………」

時刻は5時32分。4人は清算を済ませてボーリング場を後にした。

(卓司) 「てかなんで真一そんなに金持ってねえんだよ！」

(真一) 「いやゝ気付いたら300円しかなくてよお。」

真一は少し恥ずかしそうに言った。

(静流) 「だからあんな賭けを言い出したのか！」

(真一) 「いやゝはははは……………卓司も直樹も悪かったな。」

(卓司) 「まあゲームだから別にいいけどさ。」

(直樹) 「まあねえ。」

卓司と直樹は少し諦めた顔をしながらそう言った。

(静流) 「じゃ俺電車乗るからここで解散だな。今日は楽しかったぜ！」

(直樹) 「あ、俺も電車に乗らなきゃ。」

(真一) 「俺たちはこれから歩きだな卓司。」

(卓司) 「おう、それじゃあな！」

(直樹) 「バイバイ！」

そして静流と直樹は駅の中に入っていく、真一と卓司は歩いて家に帰っていった。

(真一) 「今日は楽しかったぜ。ありがとな。」

(卓司) 「なあに、俺もとにかく遊びたかったからさ。」

真一と卓司は2人で住宅街を歩いていた。その時……

(卓司) 「真一。」

(真一) 「ん？」

(卓司) 「ちょっと話をしないか？」

卓司は住宅街の中にある公園のベンチを指さしてそう言った。

(真一) 「ああ、いいぜ。」

時刻は6時17分、夕焼け空の下真一と卓司は公園に寄ってベンチに座った。

(真一) 「話ってなんだよ？」

真一が問いただと卓司は突然神妙に畏まった顔つきになっていた。そして……

(卓司) 「俺さ……自殺を考えてんだよね。」

(真一) 「！」

卓司は軽い口調で真一に自殺をほのめかした。それを聞いた真一は驚いていたが、どこか異様な空気を醸し出していた。

(卓司) 「いや、別に死にたいってわけじゃねえんだけどさ。なんかこんなご時世じゃん？ 将来が不安っていうかなんかさ……」

卓司の話を真一は静かに聞いている。

(卓司) 「就活もやる気でねえし就職したところで上司に扱き使われるだけだろ？ 大学卒業したらもう生きてる意味ねえなあって思っ
てよ。」

(真一) 「……………」

真一は何も言わず卓司の話を聞く。

(卓司) 「真一はどう思う？ やっぱり自殺なんて馬鹿らしいか？」

卓司は真一に問いただしてみた。すると卓司は思わぬ言葉を耳にする……………

(真一)「…………奇遇だな。」

すると真一はベンチから立ち上がり、卓司の方を見てこう言った。

(真一)「俺もお前と同じこと考えてたぜ。」

(卓司)「!」

真一の言葉に卓司はとても驚いていた。

(真一)「俺も4回生になった頃からずっと考えてた。今の社会は屑どもが社会を支配してる。そんなところに出たって何の面白みもない。人間の屑が支配してる社会に興味はねえし、楽しみが全部なくなるんないっそのこと死んじまった方がいいかもしれねえってな。」

卓司は驚いた表情のまま啞然としていた。

(真一)「どうした？」

(卓司)「いや、まさか真一が自殺を考えてるなんてよ……………」

(真一)「意外か？」

(卓司)「だってお前超エリートじゃん!? お前程の天才なら扱き使われることはねえだろ!？」

(真一)「言っただろ。屑どもが支配してる社会に興味はねえって。それに何をやってもうまくいくんじゃない。逆にも面白くない。みんなは俺のこと天才天才っていうけど俺は天才って言われるこの才能が邪魔にしか感じねえのさ。」

(卓司)「それ聞く人が聞いたらすっげえ嫌味だぞ？」

(真一)「かもな!」

真一と卓司は笑いながら話し合っていた。

(卓司)「へえ、天才ってのも考え物なんだな。」

(真一)「まあな。」

(卓司)「……………なんか真一に話せてよかったぜ。」

卓司は笑顔になってベンチから立ち上がった。

(真一)「俺もだ。」

そして真一と卓司は2人で公園を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9162p/>

されど大海は天を摩る

2011年1月9日05時16分発行